

今週の為替相場見通し(2017年10月30日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		113.25 ~ 114.45	113.67	111.50 ~ 115.50
ユーロ	(ドル)		1.1574 ~ 1.1837	1.1607	1.1400 ~ 1.1750
(1ユーロ=)	(円)		131.76 ~ 134.50	131.97	130.00 ~ 133.50
英ポンド	(ドル)		1.3070 ~ 1.3278	1.3120	1.3000 ~ 1.3350
(1英ポンド=)	(円)	*	148.91 ~ 151.40	149.23	148.00 ~ 152.00
豪ドル	(ドル)		0.7625 ~ 0.7835	0.7678	0.7500 ~ 0.7780
(1豪ドル=)	(円)	*	87.04 ~ 89.10	87.27	85.50 ~ 88.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1)今週の予想レンジ: 111.50 ~ 115.50 円

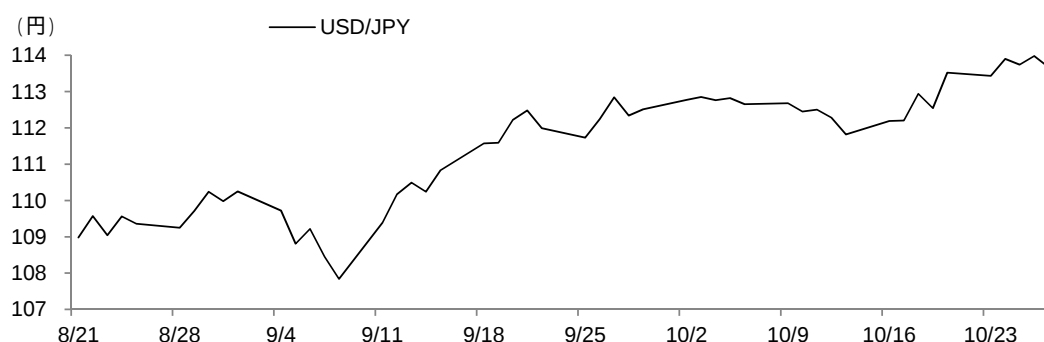
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上値重く推移。週末に投開票された衆議院議員選挙で与党が大勝したことから、週明け23日のドル/円はギャップアップして113円台後半でオープン。一時114円を上抜けたが本邦輸出勢によるドル売りが意識されて113円台後半へ値を下げ、その後も米金利低下やNYダウ平均が下落する中、週安値となる113.25円まで続落した。24日は次期FRB議長を巡る共和党の挙手投票でテイラー氏が最も支持を得たことが伝わり、113円台後半まで上昇。25日は米10年債利回りが節目の2.4%を上回ったことを背景に一時114.24円まで上昇するが、米株が軟調となり米金利が低下すると113円台後半まで値を下げた。26日は北朝鮮の外務省高官が核実験を示唆し、地政学リスクが意識されると113円台前半まで続落。しかし、ECB政策理事会における声明文や会合後のドラギECB 総裁による発言内容がハト派的と捉えられ、ドル買い優勢になるとドル/円は113円台後半まで反発。27日はユーロが軟調推移を見せる中、発表された米国の7~9月期実質GDP(1次速報)が予想を上回るとドル買いが強まり、ドル/円は週高値となる114.45円まで上昇。しかしトランプ米大統領が次期FRB議長にパウエルFRB理事を指名する方向に傾いているとの報道を受けてドル買いが弱まるとドル/円は113円台半ばで軟化して越週となった。

今週のドル/円相場は引き続き上値重い展開を予想する。ここ数週間にわたり市場の関心を集めているのは次期FRB議長人事の動向である。足許の報道を見る限り、パウエルFRB理事もしくはテイラー氏が優勢とされるも、正式な指名発表までは市場は人事報道に一喜一憂となる展開が予想される。今週はイベント週にあたり、10月31日~11月1日にかけてはFOMCと日銀金融政策決定会合が開催される。いずれの会合も現状維持が予想されるが、FOMCでは今月よりバランスシートの正常化プログラムが開始されることもあり、メンバーの経済動向の見方には注目が集まる。経済指標でも1日(水)に米10月ADP雇用統計、3日(金)には米10月雇用統計と重要指標の発表を控え、ハリケーンの影響後の雇用動向には注目が集まろう。今週は上記イベントに加え先週はECB政策理事会結果を受けてユーロ相場が大きく下落したこともあり、ポジション調整に伴うドル売り圧力が予想されることからドル/円相場はイベント通過までは、上値重い展開が予想されよう。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/23~10/27)の値動き: 安値 113.25 円 高値 114.45 円 終値 113.67 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 高田 裕

(1) 今週の予想レンジ: 1.1400 ~ 1.1750 130.00 ~ 133.50 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は週後半に急落する展開。週初 23日に 対ドル1.17 台後半、対円134円台前半でオープンしたユーロは、週内に ECB 政策理事会を控えて様子見ムードが強い中、スペイン・カタルーニャ自治州の独立問題への懸念から 1.17 台前半まで値を下げた。翌24日は1.17 台後半を回復し、さらに米税制改革案に関するヘッドラインを受けたドル売りに一時 1.18 手前まで急上昇したが、その後はドル買いが強まったことから直ぐに 1.17 台後半まで値を戻した。週中25 日は ECB 政策理事会を翌日に控えて 1.17 台後半で小動きが続いていたが、米金利低下を背景にドル売りが強まると 対ドル1.18 台前半、対円では週高値の134.50円まで急伸した。翌26 日もユーロは続伸し、一時対ドル週高値となる1.1837 をつけた。だが、ECB 政策理事会の声明文で必要があれば拡大資産購入プログラム(APP)は継続されることが示されると 1.17 台半ばまで急落。会合後の記者会見においてドラギ ECB 総裁が APP 終了後も現在の政策金利が相当期間にわたり据え置かれることを示唆すると 1.16 台前半まで一段安となった。さらに週末27日もユーロ売りが優勢となる中、カタルーニャ自治州の独立宣言が報じられるとユーロは週安値を更新し対ドル1.1574、対円131.76円まで値を下げた。その後値を戻すも結局対ドル1.16台前半、対円131円台後半で越過している。

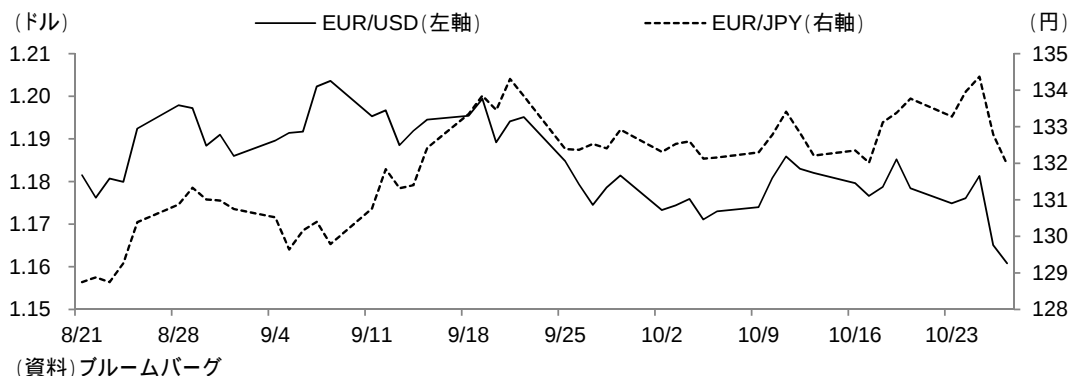
今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想する。今週は日米の金融政策会合を始めユーロ圏外のイベントに反応する神経質な値動きが予想されるものの、先週報じられたECBによる現行緩和策のハト派的縮小やカタルーニャ情勢等を背景にユーロは軟調な展開となろう。先週26日に開催された政策理事会で、ECBは現行の金融政策を据え置いた。各月600億ユーロとしているAPPについて、購入額を月300億ユーロに減らした上で、来年1月以降も継続し9月まで延長するとした。ただし、購入額や期間については、必要に応じて拡大、延長すると記したことが市場で弱気と評価され、加えてドラギECB総裁のコメントでも緩和策解除に慎重な姿勢が強調されたことから、理事会後はユーロ売り優勢の展開となっていた。今週予定されるユーロ圏の経済指標としては、31日(火)に9月失業率、10月消費者物価指数(HICP)がある。ドラギ総裁は理事会後の会見で「十分な」景気支援を必要とした背景として弱いインフレ率を挙げており、10月のHICPで軟調な結果となればユーロは下値を探る展開となろう。また、政治面でもカタルーニャ情勢についてはスペイン中央政府と州政府の亀裂は一層大きくなっており予断を許さない状況であるため、ユーロは積極的に買われ難いと思われる。一方、欧州域外のイベントとしては、10月31日～11月1日の米FOMCと3日(金)の米10月雇用統計が注目であろう。今回のFOMCでは政策の現状維持が見込まれる中、一時的と評している低インフレ率や基調判断が年内利上げにどう影響するか、声明文の内容に留意したい。また前回7年ぶりの雇用減少となった雇用統計も注目であろう。予想外に冴えない内容となれば、足元織り込まれた利上げ期待が剥落しユーロがサポートされるシナリオには留意したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/23～10/27)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1574 高値 1.1837 終値 1.1607

(対円) 安値 131.76 高値 134.50 終値 131.97



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3350 148.00 ~ 152.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は対ドルで軟調、対円で往って来い、対ユーロでは堅調と主要通貨に対してまちまちの値動きを見せた。25日のポンド上昇を除けば、値動きの大半はドルやユーロといった他通貨側の要因によるものであったと思われる。週明けは本邦衆議院選挙で与党が大勝したものの、ポンド/円はほぼ横ばい推移。ポンド/ドルも方向感なく推移した。24日は好調な米企業決算を受けて米金利が上昇する動きにつられドル買いとなる中、ポンド/ドルも1.32台から1.3113まで下落。しかし25日に発表された英7~9月期GDPが前期比+0.4%と市場予想+の0.3%を上回る結果となり、マーケットが薄い中ポンドは急騰。ポンド/ドルは1.3250越えた。26日には次期FRB議長候補争いからイエレン氏がはずれた、とポリティコが関係者の話として報じたほか、米下院で予算決議案が通過したことを受けドル買いの流れに。さらにECB理事会がほぼ予想通りの結果だったものの、声明文がハト派ととらえられユーロが下落する流れにポンドもつれ安となり、結果としてポンド/ドルは1日で100ポイント超の下落幅となった。27日も前日の流れを受けドル買いが進行、一時週内の安値1.3070を付けるも、次期FRB議長にパウエル氏指名にトランプ米大統領が傾くとの関係者の話が報じられるとポンド/ドルは反発。またスペインのカタルーニャ議会が独立宣言を可決したことに対ユーロでも堅調となり、ユーロ/ポンドは週内の安値近辺で越過となった。

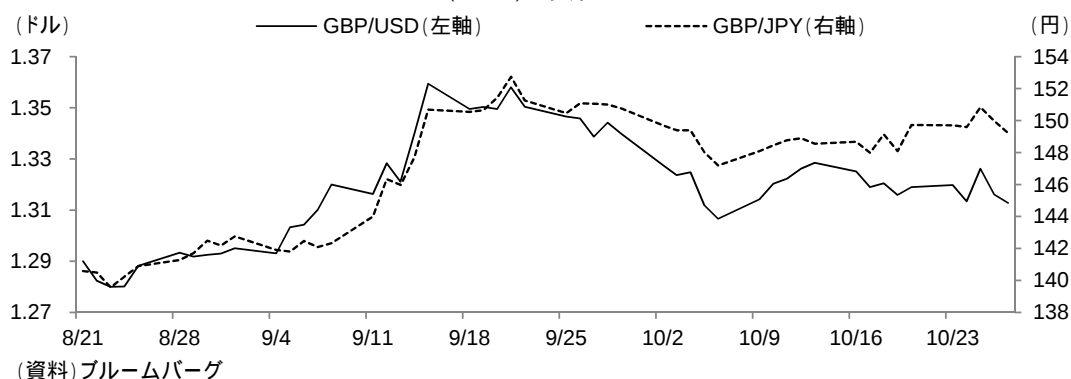
今週の英ポンド相場は底堅い展開を予想。英経済指標は11月1日(水)の10月英国製造業PMI、10月英住宅価格、11月3日(金)の10月英国サービス業PMIなどがあるが、なんといっても注目は11月2日(木)の英中銀(BOE)の金融政策決定会合であろう。10年振りにBOEは政策金利を引き上げるとみられ、市場においても約80%が織り込まれている。それゆえ焦点となるのはそれ以降の引き上げが示唆されるかどうかであろう。先物市場では来年の9月までに2回目の利上げが想定されており、英景気の底堅さを考えると来年の追加利上げが示唆されると思われるが、一方で英国の欧州離脱という難題を抱えていることから慎重な姿勢が示されるのではないだろうか。EU側が欧州離脱交渉が破綻して終わることに備えているとの報道もあり、予断を許さない状況が続いている。しかし、通貨オプション市場におけるポンド/ドルの1か月物リスクリバーサルがポンドコール方向に継続して縮小していることを見ても、サプライズがなければ英ポンドは底堅い動きとなると思われる。英国外に目を向けると、注目は次期FRB議長人事であろう。トランプ米大統領がアジア各国を歴訪する前に発表するとの報道もあり、ドル主導での動きには気を付けたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/23~10/27)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3070 高値 1.3278 終値 1.3120

(対円) 安値 148.91 高値 151.40 終値 149.23



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7500 ~ 0.7780 85.50 ~ 88.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、対ドル・対円ともに下落する展開。週初23日は対ドルで0.78台前半、対円で89円ちょうどでオープン。24日は米予算決議案の下院採決が26日に行われる見通しと報じられ、ドル買いの動きが強まると、対ドルで0.78を明確に割り込む展開。翌25日、注目された豪7～9月期CPIが、ヘッドラインで前期比+0.6%（市場予想：同+0.8%）、トリム平均で前期比+0.4%（市場予想：同+0.5%）と、ともに市場予想を下回ったことから豪ドルは急落し、対ドルで0.77割れ、対円で87円台後半まで下落。翌26日もこの流れが続き、海外時間には米金利が一段高となる動きも相まって、対ドルで0.76台半ばまで続落。さらに翌27日には、豪高等裁判所が二重国籍のまま当選したバーナビー・ジョイス副首相について、選挙での当選が無効だとする判決を下し、与党が下院で過半数割れとなることが確定したことから、豪ドルは対ドルで週間安値となる0.7625を示現。その後、海外時間に次期FRB議長人事についてパウエル氏が有力との報道が流れ、米金利低下、ドル売りの動きとなったことから調整の動きとなり、対ドル、対円それぞれ0.7680、87円台前半レベルで越週した。

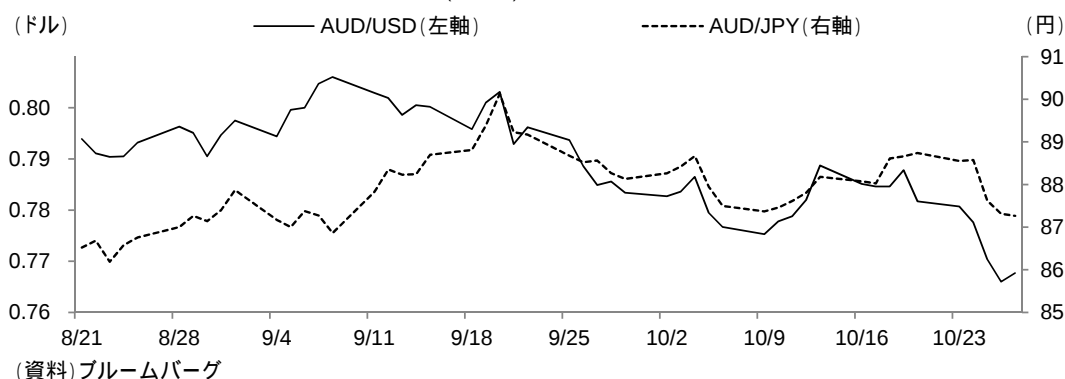
今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想。ターンブル首相率いる与党が下院で過半数割れとなり、政局不安が意識されるものの、ジョイス氏が12月2日に予定される補欠選挙で再選されるとの見方が優勢。一方で、先週は全般的なドル買い地合いに加え、豪7～9月期CPIが市場予想を下回ったことから豪ドルは軟調推移となった。RBAのデベル副総裁が26日、「豪州のインフレは最近の統計値が示すよりも弱い可能性がある」と指摘したことも相まって、RBAの利上げ期待は高まりづらい状況。またテクニカルにも、6月来サポートされてきた200日移動平均線を下抜けしたことより下値不安が意識される。米金利の先高感が強い状況下、豪ドルのポジションも依然としてロングがはけていないことや、鉄鉱石価格が安値圏での動きとなっていることを勘案すると、豪ドルの上値が重い展開は続きやすいか。来週は、2日(木)に豪9月貿易収支、豪9月住宅建設許可件数、3日(金)に豪9月小売売上高が発表される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/23～10/27)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7625 高値 0.7835 終値 0.7678

(対円) 安値 87.04 高値 89.10 終値 87.27



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。